

令和元年6月19日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01695

研究課題名(和文) 球技スポーツにおける卓越したコーチの戦術指導に関する実践知の構造とその獲得過程

研究課題名(英文) The structure of the effective coaching for tactical instruction and its developmental process: from narratives of prominent ball game coaches

研究代表者

會田 宏 (Aida, Hiroshi)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：90241801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、球技における卓越したコーチは、1) チームの目標を達成できるように個々の選手の戦術力を強化する「演繹的な思考」と、個々の選手の戦術力を調和させてチームの達成力を高める「帰納的な思考」の両方を働かせていること、2) 技術的要素の遂行を阻害する状況を意図的に設定し、個人戦術力を洗練させていること、3) これらの思考は自らのコーチング行動を省察することで深まる可能性があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、戦術指導に関する実践知を多面的な語りとして収集する方法を開発した点、戦術指導に関する実践知を構造化した点において学術的意義を持つ。また、国内外の卓越したコーチの持つ戦術指導に関する実践事例を、我が国のコーチ育成に寄与できる情報として整理し、それをウェブサイトなどで公開することを通して、さまざまな研究者や実践現場の指導者と戦術指導力に関して意見交換できる環境を整えたという点において社会的意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：The main results obtained in this study are as follows: 1) The prominent ball game coaches use "the deductive thinking" in which they strengthen the tactical ability of each player to achieve the goals of the team, as well as "the inductive thinking" in which they harmonize the tactical ability of each player and improve the team's achievement. 2) The prominent ball game coaches refine the tactical ability of each player by intentionally setting the situation that prevent the realization of the technical elements. 3) These thoughts can be deepened through the reflection on their own coaching behavior.

研究分野：ハンドボールコーチング論

キーワード：個人戦術指導 チーム戦術指導

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

熟達したコーチは、選手の運動感覚に共感し、適切な課題を抽出し、練習を処方している。また、自チームと対戦相手の競技力を正確に診断し、チームを勝利に導くゲームプランを設計し、それを具現化するコーチングを行っている。彼らは状況と行動とを結びつけるのに分析的な原則に頼らず、一つひとつの状況を直観的に把握し、正確な問題領域に的を絞って指導している(藤原, 2012)。このような指導に関する実践知は、実践と省察とを長年繰り返すことで、無自覚的に、暗黙的に獲得される知であり、個人的・経験的・不定形な知(ベナー, 2004)である。そのため、それを妥当性と信頼性を持って明らかにする方法は確立されておらず、国内外を問わずほとんど研究されていない。その傾向は、さまざまな戦術的要素の指導が強調される球技スポーツにおいて強い。しかし、次世代を担うコーチの育成という問題に直面した時には、「曰く言い難い」ではすまされず、実践知の言語化が必要不可欠となってくる(金井・楠見, 2012)。卓越した指導に関する実践知の構造を明らかにすることは、コーチング学においては、コーチの育成に直接的に貢献する中核的なテーマであるにもかかわらず、未着手なのである。

本研究代表者は、平成 18 年からの 10 年間で、科学研究費補助金(基盤研究 C)の交付を 3 回、それぞれ研究代表者として受けて、卓越した球技選手における個人戦術およびグループ戦術に関する実践知について検討してきた。一連の研究では、まず球技における個人戦術およびグループ戦術に関する実践知の理解の仕方を明示し(會田, 2012)、次にそれらを質的に研究する手続きを開発し(會田, 2012)、さらに国際レベルで活躍した球技選手が獲得した個人戦術およびグループ戦術に関する実践知の構造(會田, 2007; 會田, 2008)とその獲得過程(會田・坂井, 2009)について明らかにしてきた。研究成果は、コーチング学分野の研究成果として発表するとともに、選手および指導者が共感・共有できる情報として、広く実践現場に発信してきた。しかし、相手とのかけ引き、味方とのあわせといった複雑な相互関係が入り組む球技の戦術を、より合理的に指導するためには、選手の戦術力に加え、卓越したコーチの戦術指導力の構造を明らかにする必要がある。ここに本研究の着想の原点がある。

高いレベルの知識やスキルの獲得のためには、およそ 10 年にわたる練習や経験が必要である(Ericsson, 1996)。10 年にわたる熟達化の段階は、初心者、一人前、中堅、熟達者のように大きく 4 段階に分かれており、段階間の移行には壁を乗り越える形で質的に大きな熟達化の進展がある(金井・楠見, 2012)。球技スポーツにおける卓越したコーチたちは、戦術的指導力を熟達させていく過程において、どのような壁をどのような方法で乗り越えていったのだろうか。この戦術指導力の獲得過程を例証的に明らかにし、その共通性と相違性を分析することは、さまざまな習熟段階にあるコーチに、次の段階に進むための「めあて」を示すことにつながる。また卓越したコーチたちが獲得している戦術指導力は、どのような能力で構成され、それぞれの能力はどのような関係を持っているのであろうか。この戦術指導力の構造を明らかにすることは、熟達を目指す若手コーチに戦術指導力の「目標像」を示すことにつながる。さらに、それらを国内外のトップコーチ間で比較することは、国際的な視野を持ったコーチの育成につながる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、球技スポーツにおいて、国内外の卓越したコーチの持つ戦術指導に関する実践知(戦術指導力)の構造とその獲得過程について明らかにし、我が国のコーチ育成に寄与できる知見を実践現場に提供することであった。この目的を達成するために、以下の 4 つの課題を解決した。

- (1) 戦術指導に関する実践知を多面的な語りとして収集する方法の開発
- (2) 国内外の卓越したコーチの持つ戦術指導に関する実践知(戦術指導力)の収集
- (3) 戦術指導に関する実践知の解釈・構造化とその獲得過程の明示
- (4) コーチ育成に寄与できる知見の提示

3. 研究の方法

(1) 戦術指導に関する実践知を多面的な語りとして収集する方法の開発

まず、国内外の卓越したコーチの持つ戦術指導に関する実践知を語りとして収集するために、質的研究における面接法の 1 つであるアクティヴ・インタビュー法のインタビューガイド(インタビューの標準的な流れ)を作成した。作成にあたっては、指導すべき個人戦術力とグループ戦術力を、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて検討するとともに、ハンドボールにおいて日本代表チームを指導した経験を持つ研究者 3 名、ハンガリー体育大学に所属し、ハンドボールコーチング論を専門とする研究者 1 名と共同で検討した。次に、作成したインタビューガイドを用いて、日本の大学ハンドボール界においてトップチームを指導するコーチを対象に予備調査を行い、妥当性と信頼性が保証されるインタビューガイドに修正した。

(2) 国内外の卓越したコーチの持つ戦術指導に関する実践知(戦術指導力)の収集

調査協力者

・国際トップレベルコーチ(2名)

ハンドボールのハンガリー女子代表チームを率いてオリンピック準優勝の実績を持つコーチと、水球のハンガリー男子代表チームを率いて 3 回のオリンピック優勝の実績を持つコーチ。

・ドイツトップレベルコーチ(3名)

ドイツにおけるハンドボールの育成年代のトップコーチ 3 名。

・国内トップレベルコーチ (16 名)

日本国内トップレベルの実績を持つコーチ 16 名。専門種目の内訳は、ハンドボール 5 名、サッカー 2 名、バレーボール 2 名、テニス 7 名であった。

調査方法

調査に先立ち、いずれの調査協力者にも本研究の趣旨を説明し、調査に関する了解を得た。調査協力者には、原則として調査の 1~2 週間前に、コーチング・ヒストリーに関する内省を活性化させるアンケート調査票をメールにて送信し、記述・返信させ、それをインタビュー時の補助資料とした。インタビュー調査は、開発したインタビューガイドに則って行った。ここまでの手続きは、いずれも調査協力者の母国語を用いて行った。

(3) 戦術指導に関する実践知の解釈・構造化とその獲得過程の明示

調査協力者の語りを質的に分析した。分析では、まず、以下の a~d の 4 つの手順を踏んだ。

a) インタビュー調査における全ての発言内容からトランスクリプト(逐語録)を作成した, b) 国外で行った調査に関しては、それを日本語に翻訳した, c) それぞれのトランスクリプトを精読し、戦術指導に関する発言に着目して調査協力者ごとに語りの内容としてまとめた, d) 語りの内容を考察し、戦術指導に関する実践知を個別事例としてまとめた。次に、個別事例の内容を、チーム戦術指導と個人戦術指導のそれぞれにおいて「チームや選手が違って共通すると思われること」を選び出し、それらの共通性および特殊性について考察し、個別事例を超えた一般性をもつ理論の構築(構造化)を試みた。

4. 研究成果

(1) チーム戦術指導の実践知の構造とその獲得過程

卓越したコーチは、チームの目標を掲げ、その達成に最適な戦略を策定し、個々の選手の戦術力を強化するという「演繹的な思考」と、個々の選手の戦術力を査定し、達成可能な戦略を作成し、チームの達成力を高めるといった「帰納的な思考」の両方を働かせながら戦術指導を行っていることが明らかになった。また、個々の選手の協働の程度に関しては、ゲームトレーニングを活用して査定していること、最悪の事態を想定したリスクマネジメントを行っていることも明らかになった。これらの思考および行動は、自らのコーチング行動を省察する中で、いくつかの段階を経て高められる可能性が示唆された。

(2) 個人戦術指導の実践知の構造とその獲得過程

テニスにおける卓越したコーチは、個人戦術力の指導において、動きの遂行を阻害する状況を意図的に設定し、個々の選手が有しているコツやカンを破壊し、洗練させたい個人戦術力を選手自身に自得させようとしていること、選手自身の感覚を尊重し、内在的フィードバックと外在的フィードバックのずれが生じないように個人戦術力を習得させようとしていること、「動作」ではなく「相手との駆け引き」を代行分析し、トレーニングを処方していることが示された。

また、ハンドボールにおける日本とドイツ両国の小学生年代のトップチームでは、両国のコーチとも基本的なスキルの習得を「個」の育成方針として掲げていたこと、日本は動作の習熟を、ドイツは多様な動作経験の蓄積をそれぞれ重視して練習を行っていたこと、試合でのゲームパフォーマンスは両国間で大きな差はないが、日本は個人の役割を分担するプレー方法を、ドイツは状況を一人で解決するプレー方法が多いことが明らかになった。

(3) コーチ育成に寄与できる知見の提示

学術的意味を持つ研究成果に関しては、日本体育学会機関誌「体育学研究」、日本コーチング学会機関誌「コーチング学研究」、日本スポーツ運動学会機関誌「スポーツ運動学研究」、日本ハンドボール学会機関誌「ハンドボールリサーチ」において学術論文として発表するとともに、関連する学会大会などで口頭発表した。実践現場に提供できる研究成果に関しては、日本ハンドボール協会指導委員会などと協働し、我が国のコーチ育成に寄与できる情報として整理し、ウェブサイトなどで公開した。これらを通して、他の研究者や実践現場の指導者と戦術指導力に関して意見交換できる環境を整えた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 12 件)

中山沙織, 會田 宏: 小学生年代のハンドボールにおける「個の育成」を目指したルールの下での選手育成活動について: 日本とドイツのトップチームを比較して. 体育学研究, 第 64 巻第 1 号, 285~301, 2019 査読有

<https://doi.org/10.5432/jjpehss.18066>

山田永子, 服部友郎, 下拂 翔, 吉兼 練: オランダ女子ハンドボールの強化プロジェクト「Orange Plan」. ハンドボールリサーチ, 第 7 巻, 37~43, 2018 査読有

北崎悦子, 會田 宏: テニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションに関する実践知: 国際レベルで活躍した女子テニスプレーヤーの語りを手がかりに. 体育学研究, 第 63 巻第 1 号, 421~431, 2018 査読有

<https://doi.org/10.5432/jjpehss.17043>

山田永子, 中村 剛: 球技スポーツにおけるスカウティングの動感能力に関する研究 - ハン

ドボール競技のキーパーの能力性を中心にして - .スポーツ運動学研究, 第 30 号, 1~20, 2018 査読有

伊東裕希, 井上元輝, 會田 宏: ハンドボール競技におけるオフェンスプレーを観察する着眼点: 卓越した指導者の観察記述を手がかりとして. ハンドボールリサーチ, 第 6 巻, 9~21, 2017 査読有 (日本ハンドボール学会奨励賞受賞)

下拂 翔, 永野翔大, 山田永子, ネメシュ ローランド, 會田 宏: ハンドボール競技におけるサイドシュートに対するゴールキーピング動作: 世界女子トップレベルにおける同一身長

のゴールキーパーを対象に. ハンドボールリサーチ, 第 6 巻, 69~78, 2017 査読有
井上元輝, 藤本 元, 會田 宏: ハンドボールにおけるステップシュートの指導法に関する事例: 国際レベルのコーチ資格を有する卓越した指導者の語りから. ハンドボールリサーチ, 第 6 巻, 79~87, 2017 査読有

永野翔大, ネメシュ ローランド, 藤本 元, 會田 宏: ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究. コーチング学研究, 第 30 巻第 2 号, 109~123, 2017 査読有 (日本コーチング学会奨励賞受賞)

<http://jcoachings.jp/jc2016/wp-content/uploads/2017/06/02-原著論文-永野翔大先生-他3名様.pdf>

藤本 元, 中村 剛: ボールゲームにおける監督の状況把握能力に関する研究 - ハンドボール競技を例証として - . スポーツ運動学研究, 第 29 号, 45~61, 2017 査読有

吉兼 練, 加納明帆, ネメシュ ローランド, 會田 宏: ハンドボール女子「2020 ターゲットエイジ」における攻撃の現状と課題. ハンドボールリサーチ, 第 5 巻, 1~12, 2016 査読有 (日本ハンドボール学会奨励賞受賞)

船木浩斗, 會田 宏: ハンドボールにおける 1 対 1 の突破阻止に関する実践知—国際レベルで活躍した防御プレーヤーの語りを手がかりに—. コーチング学研究, 第 30 巻第 1 号, 43~54, 2016 査読有

<https://jcoachings.jp/jc2016/wp-content/uploads/2017/11/04-1.pdf>

松木優也, 會田 宏: ハンドボール競技における防御および速攻の戦術指導に関する事例報告. コーチング学研究, 第 29 巻第 2 号, 209~220, 2016 査読有

<https://jcoachings.jp/jc2016/wp-content/uploads/2017/11/29-2.pdf>

[学会発表](計 12 件)

中山紗織, 會田 宏: ドイツハンドボールの小学生年代における選手育成活動の歴史的変遷—専門家に対するインタビュー調査を通して—. 日本ハンドボール学会第 7 回大会, 2019 年 3 月 2 日, 日本体育大学世田谷キャンパス (東京都世田谷区) (日本ハンドボール学会大会賞受賞)

小俣貴洋, 會田 宏: 初級コーチが大学女子ハンドボールチームに防御戦術を指導した事例報告. 日本ハンドボール学会第 7 回大会, 2019 年 3 月 2 日, 日本体育大学世田谷キャンパス (東京都世田谷区)

Komata, T., Miwa, K., Aida, H.: Factors affecting sex differences in top-level handball games among Japanese college students. 2018 KNSU International Conference -Asia-Pacific Conference on Coaching Science-, 2018 年 9 月 25 日, Korea National Sport University, Seoul, Korea (Outstanding Researcher Award: 優秀研究者賞受賞)

中山紗織, 會田 宏: ドイツ・ライプツィヒ U10 チームでのハンドボールコーチング活動に関する事例報告: コーチの視点の変容に着目して. 日本コーチング学会第 29 回大会, 2018 年 3 月 22 日, 山梨学院大学 (山梨県甲府市)

北崎悦子, 會田 宏: テニスのラリーにおける指導の実践知に関する事例的研究: 世界トップ 60 に到達した女子テニス選手を指導したコーチの語りを手がかりに. 日本コーチング学会第 29 回大会, 2018 年 3 月 21 日, 山梨学院大学 (山梨県甲府市)

北崎悦子, 會田 宏: テニスのラリーにおける個人戦術の指導の実践知に関する事例的研究: 国際レベルで活躍した元女子テニス選手を指導したコーチの語りを手がかりに. 第 29 回日本テニス学会, 2017 年 12 月 10 日, 慶應義塾大学日吉キャンパス (神奈川県横浜市) (日本テニス学会研究奨励賞)

北崎悦子, 會田 宏: テニスのグラウンドストロークラリーにおける個人戦術の実践知に関する事例的研究: 大学女子トップレベルで活躍した選手の語りを手がかりに. 日本体育学会第 68 回大会, 2017 年 9 月 10 日, 静岡大学 (静岡市)

永野翔大, 中山雅雄, 會田 宏: 日本サッカー協会における一貫指導システムの構築に関する事例的研究: 日本サッカー協会指導者養成サブダイレクターの語りを手がかりに. 日本体育学会第 68 回大会, 2017 年 9 月 10 日, 静岡大学 (静岡市)

中山紗織, 會田 宏: 小学生年代のハンドボールにおける日独トップチームのゲームパフォーマンスの比較. 日本体育学会第 68 回大会, 2017 年 9 月 10 日, 静岡大学 (静岡市)

永野翔大, Nemes Roland, 藤本 元, 會田 宏: 日本とドイツにおけるハンドボールの一貫指導プログラムに関する比較研究. 日本体育学会第 67 回大会, 2016 年 8 月 26 日, 大阪体育大学 (大阪府泉南郡)

田代智紀, 會田 宏: ハンドボール指導者の指導観の変化をもたらす要因に関する事例研究.

日本体育学会第 67 回大会，2016 年 8 月 26 日，大阪体育大学（大阪府泉南郡）
下拂 翔，永野翔大，山田永子，會田 宏：ハンドボール競技における若手コーチの省察を
深める方法に関する事例報告．日本体育学会第 67 回大会，2016 年 8 月 26 日，大阪体育大
学（大阪府泉南郡）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://hand-lab.taiiku.tsukuba.ac.jp/>

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藤本 元

ローマ字氏名：FUJIMOTO, Hajime

所属研究機関名：筑波大学

部局名：体育系

職名：助教

研究者番号 (8 桁)：90241801

研究分担者氏名：ネメシュ ローランド

ローマ字氏名：NEMES, Roland

所属研究機関名：法政大学

部局名：スポーツ健康学部

職名：専任講師

研究者番号 (8 桁)：50718997

研究分担者氏名：山田 永子

ローマ字氏名：YAMADA, Eiko

所属研究機関名：筑波大学

部局名：体育系

職名：助教

研究者番号 (8 桁)：80611110

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。